

# えん + じん

発行：  
多賀城市市民活動サポートセンター  
(たがさぼ)

第11号【毎月1日発行】

発行日：平成24年8月1日

被災地で生活している方、復興支援活動をしている方を応援する情報誌です。



多賀城の仮設住宅で呼び鈴の取り付けが行われました。この取り組みは、多賀城市からの依頼のもと、住民主体の復興をサポートする「復興応援団」が呼びかけ、実施されました。作業をするのは、地元のボランティアが集まった「多賀城災害ボランティアネットワーク」や学生ボランティア、そして仮設住宅の住民たちです。

手先の器用な住民の方が配線作業のコツを教えたり、震災の体験を話す場面も見られました。作業を通して住民とボランティア、そして世代を越えたさまざまな交流が生まれました。



写真：協力して呼び鈴付け作業を行う様子

## もくじ

- P 1…仮設住宅に呼び鈴取り付け
- P 2…特集 子ども心を受け止める地域をつくる
- P 3…多賀城お役立ち情報コーナー
- P 4…NPO相談窓口／たがさぼブックレビュー

# 特集 子どもの心を受け止める地域をつくる

7月から夏休みに入り、家庭やご近所、地域行事等で子どもと接する機会が増える時期となりました。今回は、多賀城で子どもを対象とした支援活動を行っている団体を紹介します。復興を進めることや地域をつくっていくにあたり、見落としがちな「子どもの視点」を取り入れるきっかけとなります。

## ●居場所のなかった子どもたち

被災者同士の生活環境が隣り合い、十分にプライベートが確保できなかった避難所では、子どもたちはまわりの大人に気を遣いながら遊ばなければなりません。仮設住宅に入居してからも、建物が密集していることもあり、外で思う存分遊ぶことができなかったり、集会所は「大人が使う場所」という認識をもつ子が多く、気兼ねなく遊べる場所がありませんでした。その中で、不安やストレスを溜めつづけ、言いたいこともなかなか吐き出せずにいます。子どもたちには、安心して遊ぶことができる場所、そしてしっかりと自分に向き合い、寄り添ってくれる大人が必要です。

## ●“また来る”をつづける

「やましたさんの工作教室」は、工作を通して子どもの居場所づくりを行っています。代表者である東京在住の山下剛史さんは、被災地の子どもたちに何かできることはないか、という思いから、平成23年5月、避難所となっていた多賀城市文化センターで活動を始めました。避難所が閉鎖した現在も、月に一度東京から足を運び、多賀城市内の仮設住宅集会所で工作教室を行っています。

毎月多賀城で活動を続けている理由は、子どもがもたらしたある一言です。「震災後、たくさんの方が来てくれた。また来てね、と言うと、また来るね、と言うけれど、また来てくれた大人はいないんだ。」この言葉を聞いた山下さんは、長期的に支援を行っていくことを決めました。

子どもたちは、「仲良しだった友達は地震のせいで引っ越しちゃってもう会えないの。」「家にあった自転車が津波に流されちゃった。」といった言葉をつぶやくことがあるそうです。子どもが時折見せる寂しそうな様子は、子どもからのSOSなのかもしれません。

活動を続ける中で、集会所にいる大人と楽しく話をしたり、時には叱られたりと、周りの大人に見守られる子どもの姿も目にしました。震災前は地域の大人と関わる機会がなかった子が、放課後に仮設住宅集会所で近所の大人と過ごし、勉強を教わるようになったこともあったそうです。

被災地には全国からたくさんの方が支援に来てくれました。ボランティアが去った後でも、地域課題を住民自らが解決できるようにするための道筋をつくることも必要です。そこで、山下さんは地元の人をメンバーに加え、活動を引き継いでいけるようにしています。地元のメンバーは「活動をすることで地域の子どもたちの現状が見えた。自分たちの地域のことは自分たちで担っていけるようにしたい。」と話します。

## ●安心できる場所・安心できる人

子どもの支援を行っている国際NGO「プラン・ジャパン」は、避難所となっていた総合体育館と多賀城公園球場仮設住宅集会所に「子どものためのスペース」を設置し、心のケアや居場所づくりに取り組んできました。現地スタッフとして運営に携わったのは多賀城市在住の高橋祥江さん。震災前は多賀城市民スポーツクラブで指導者として活動していました。活動拠点であった総合体育館が避難所となっていたこともあり、この取り組みに関わることになりました。避難所が閉鎖され、多賀城公園球場仮設住宅集会所に場を移した後も、高橋さんのいる「子どものためのスペース」は、子どもたちやその保護者たちにとって安心できる居場所となりました。

震災直後は慣れない環境に置かれたストレスのため、言動が乱暴になってしまう子や落ち着きがない子が見られたそうです。しかし、このスペースを運営していく中で、思う存分騒いだり笑ったりすることによってストレスが取り除かれ、子どもの心は安定していきました。また、年上の子が年下の子の面倒を見たり、不規則になりがちだった生活のリズムを取り戻したりといった様子も見えてきました。ここに行けば居場所がある、自分に向き合ってくれる人がいる、そういった場所が子どもたちには必要です。

## ●地域で子どもの心に寄り添う

子どもたちは、震災の不安、友達と離ればなれになってしまった寂しさ、思い切り遊べないストレス等、心にさまざまな課題を抱えています。仮設住宅はもちろんですが、仮設住宅以外の場所に住む子や仮設住宅を出た子へもケアが必要です。新しい生活環境に向かう中、子どもが子どもらしく暮らし、決して孤立することがないように、地域で見守っていくことが大切です。



夢中になって工作をする仮設住宅の子ども

# 多賀城お役立ち情報コーナー

NPOによるイベントや地域の取り組みを紹介します。困りごとの解決や復興に関わるきっかけとなる情報です。

## 地域で心を支えあうヒント ハンドブック紹介

心のケアを必要とする方がいた場合、専門家につながりことももちろん大切ですが、身近な人が支えていける環境をつくることも必要です。専門家が常にそばにいるとは限りませんし、身近な人だからこそ安心できることもあります。

今回は、心のケアが必要な方を支えていくためのヒントとなる2冊のハンドブックをご紹介します。

紹介したハンドブックは、発行団体のホームページからダウンロードすることができます。また、たがさぼでもご覧になることができます。

### 被災後の子どもの

#### こころのケアの手引き

発行:チャイルド・ファンド・ジャパン  
対象:子どもと接する立場にある方  
HP:<http://www.childfund.or.jp/>

### 被災者の心を支えるために

#### 地域で支援活動をする人の心得

発行:ケア・宮城  
プラン・ジャパン  
対象:支援活動を行っている方  
HP:<http://www.plan-japan.org/>



ノウハウが詰まったハンドブック

## 帰ってきた市民の活動拠点 大代地区公民館

長らく災害復旧工事が続いていた大代地区公民館が8月から再開します。公民館のある大代地区は津波によって大きな被害を受けた地域です。施設も被害を受けましたが、住民のみなさんが長い間待ち望んでいた活動拠点がついに戻ってきました。

8月5日(日)には開館を記念したセレモニーが行われます。企画をしたのは地元にお住まいの住民で構成された大代地区コミュニティ推進協議会。情報誌「ふれあい」の発行やボウリング大会などを通して大代地区の地域づくりを行っている団体です。今回のセレモニーに向けて企画や広報などについて協議会のメンバーのみなさんでじっくり話し合いを重ねました。当日は東豊中学校吹奏楽部による演奏、公民館を活動拠点としていた生涯学習団体による写真や作品の展示も予定しています。

住民のみなさんが企画してきたセレモニーに足を運んでください。新しくなった大代地区公民館が、みなさんをお迎えします。

## 大代地区公民館 開館記念セレモニー

日時:平成24年8月5日(日)  
午前9時30分～正午  
場所:大代地区公民館  
主催:大代地区コミュニティ推進協議会  
電話:022-364-8442

## 聴く 参加する 始めるNPO 復興いちから塾

被災地ではさまざまな団体が復興支援を行っています。たがさぼでは、支援活動を行っている団体の方をゲストに迎え、活動の様子をお話いただきながら、NPOのしくみや特徴を分かりやすくお伝えする「復興いちから塾」を開催します。

復興に向けてNPOやボランティアに参加したい方、NPOについて知りたい方、新たに団体を立ち上げたい方は、一歩踏み出すきっかけとしてぜひご参加ください。

### 復興いちから塾 受講者募集

日時:平成24年8月23日(木)  
午後7時～午後8時30分  
場所:多賀城市市民活動サポートセンター  
費用:500円(資料代)  
定員:10名(先着順)

#### ■講座内容■

- NPOの意味や仕組み、特徴
- ゲストによる復興活動紹介
- 質疑応答 フリートーク

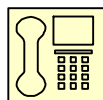
#### ■申込/問合せ■

多賀城市市民活動サポートセンター窓口、またはお電話にてご連絡ください。  
電話:022-368-7745



昨年のいちから塾の様子





## NPO相談窓口

被災者の困りごとや悩みごとに対応する相談窓口を紹介します。

### ●東日本大震災 心の相談電話●

東日本大震災により悩みや問題を抱えた被災者の方や支援活動に関わる方の精神的なサポートを行います。

対象：不安や悩みを抱えている被災者及び支援者

団体：東日本大震災心理支援センター

電話：0120-719-789(通話料無料)

時間：午後7時～午後9時(月・火・木・金曜)

H P: <http://www.jpssc.biz/>

### ●チャイルドライン●

学校のこと、家族のこと、いじめのこと等悩みや不安を抱える子どもの声を受け止めます。どんな話でも安心して相談ください。

対象：18歳までの子ども

団体：NPO法人チャイルドライン支援センター

電話：0120-99-7777(通話料無料)

時間：午後4時～午後9時(月～土曜)

H P: <http://www.childline.or.jp/>

### ●パープル・ホットライン●

災害、暴力被害、生活のことなどさまざまな悩みごとを相談できる女性専用の電話窓口です。適切な支援者へつなげます。

対象：災害・暴力・人権・生活等に悩む女性

団体：NPO法人全国女性シェルターネット

電話：0120-941-826(通話料無料)

時間：24時間対応

H P: <http://nwsnet.or.jp/purpleline/>

### ●POSSE(ポッセ)労働相談●

残業代、有給休暇、解雇、労災といった労働相談や雇用保険制度、住宅制度、職業訓練、生活保護といった行政が提供している生活支援のための情報を紹介しています。

対象：労働や生活に関してお困りの方

団体：NPO法人POSSE(ポッセ)

電話：03-6699-9359(東京)

時間：24時間対応

H P: <http://www.npoposse.jp/>



## たがさぽブックレビュー



〇たがさぽで閲覧・貸出ができます。

### 宮城県気仙沼発！ ファイト新聞

著者：  
ファイト新聞社

発行：  
河出書房新社

発行日：  
平成23年7月30日

「暗い話は書かない！」宮城県気仙沼市の避難所で子どもたちによって始められた「ファイト新聞」のルールです。B4版の用紙に手書きの題字、日々の出来事を四コマまんがや楽しいイラストで綴った壁新聞は、ブルーシートと段ボール、毛布の山に囲まれて下を向きがちだった大人たちを元気づけました。

壁新聞には「ごはんだけでなくパンも出た！やわらかく“は”がわるい人でもおいしくたべられます！」「おとうさんががれきの中からぼくのたいせつにしてたサッカーボールをひろってきてくれました！！“ちょうラッキー”」といった日々の出来事が書かれています。

本書は、3月18日の創刊号から5月2日の45号までが1冊にまとめてあります。震災のつらい体験にも負けない子どもたちが、非日常生活の中で感じた日常を明るく書きとめた貴重な報告書です。ページを開くと子どもたちの元気な声が飛び出してきそうです。

普段、大人が守っているつもりだった子どもたちが、前を向いて自分たちなりの復興に取り組む姿は、私たちに未来への希望を感じさせてくれます。

### 〇「えん+じん」バックナンバー〇

たがさぽホームページにてバックナンバーをダウンロードすることができます。また、ご希望の方はたがさぽ窓口にてお渡します。

ホームページ：<http://www.tagasapo.org/>

〇発行：多賀城市市民活動サポートセンター  
〒985-0873 多賀城市中央二丁目25-3  
(多賀城市文化センター北隣、上水道部向かい)  
電話：022-368-7745 FAX：022-309-3706  
ホームページ：<http://www.tagasapo.org/>  
スタッフブログ：<http://blog.canpan.info/tagasapo/>  
Twitter アカウント：[@tagasapo](https://twitter.com/tagasapo)  
〇編集：NPO法人せんだい・みやぎNPOセンター